

人権・男女平等分野



遠藤 まめた 委員

一般社団法人にじず 代表

一般社団法人にじず代表。トランスジェンダー当事者としての自らの体験をきっかけにLGBTの子ども・若者支援に関わる。近著に「教師だから知っておきたいLGBT入門」(ほんの森出版)ほか。NHK Eテレ「虹クワ」監修。

女性の置かれた立場から

世界の国の性別の平等度合いを示すジェンダー・ギャップ指数は、日本は146か国中118位で、相当頑張らなければならない状況にあり、政治、経済分野での遅れが指摘されています。国の調査では、女性管理職の割合が10.9%、衆議院における女性議員も9.7%と低く、一割にも満たない状況です。港区の調査でも、学校は進んでいるが、政治、職場、地域コミュニティの場では男女が平等ではないと回答している区民が多いです。港区は区長が女性で、女性の政治家も増えていますが、様々な分野で女性のリーダーが当たり前になっていったらいいと思います。

LGBTQの若者の置かれた立場から

10歳代の置かれた状況はひどく、直近の調査では、過去1年間で半数の人が死にたいと考えたと回答し、自殺未遂をした人が約2割、自傷行為をした人が約4割という結果です。10歳代の当事者の約3割が不登校を経験し、約4割がいじめの被害を経験しています。学校では男女別に並ぶなど馴染めない、誰にも自分の本当のことを言えない、友達がいなくなるんじゃないか、一番恐れていることは家族から否定されることで、一番分かってほしい人は家族だが話すことが怖いのも家族と感じています。家族がLGBTQであることを受け入れている場合、自殺を考える人が明らかに減ると分かっています。

年齢が10歳代より上の人は、職場で本当のことを知られたらどうなるか、性別を変えた際に就職でどこまでどのように説明してやりたい仕事に就けるのかなど、様々な悩みがあります。10歳代は自分が所属するコミュニティ、家族、学校でLGBTQの人の姿が見えず独りぼっちに感じたり、差別的な発言や冗談が飛び交って傷つくなど、大人以上に影響が大きいです。

多様性について、
地域の人たちと「そうだね」と納得して
考えることが大切だと思っています

性の在り方によって個人の可能性が狭められている

能力が高くても女性であるということで不利益を受ける、トランスジェンダーであることで他の子どもたちと同じように学校生活や習い事をできない、同性愛者で男性よりも職場で不利益があったり、家を探すのが難しいといった現状があります。

将来にわたっての課題

不平等を是正していく必要性に加えて、単身世帯が増えること、未婚率が高くなっていくことから、家族の枠組みに限らないセーフティネットをつくっていく必要があります。また、多様性の話が急すぎると感じる人もいて、学ぶ機会や知る機会がないと、これまでの状況と比較して戸惑いもあると思うので、理解を広めていく、間違った情報に対して間違っていると伝えていくコミュニケーションが重要だと感じています。

2040年代に向けて港区がめざす方向性

女性のリーダーシップはなかなか待っていても前に進まないの、アフーマティブ・アクションやポジティブ・アクションで、例えば、女性の3割が意思決定にかかわるなど、地域のお祭りなどいろいろな場面で取り入れていくことがいいかと思います。学校、医療、福祉などいろいろなところで、LGBTQも含めて、同姓のパートナーでも病院で家族として説明を受けることができるなど、自治体としてサポートしていく必要があると思います。法的な家族のつながりに限らず、同居や近くに住んでいる人とのつながり、例えば、家族ではないけれど、自分の終に付き合ってほしい友人などをサポートしていけると、一人暮らしの人が多い状況で良いのではないかと思います。地域における第3の居場所や制度をつくるだけでなく、地域の人たちとコミュニケーションをとって、みんなでそうだねと納得して多様性について考える方向性が重要だと思っています。

若者分野



古長谷 鷹念 委員

スカイランドベンチャーズ株式会社

麻布山幼稚園、港区立東町小学校卒業。港区立高松中学校では生徒会副会長を務める。中学在学中よりIT企業でインターンを開始し、中学3年次にはShibuya QWSチャレンジに採択。以後3年間にわたりShibuya QWSに所属。港区青少年対策六本木地区委員会では、港区キャンプをはじめとする地域行事にスタッフとして参加。N高等学校を経て、エンジニア養成機関42Tokyoに入学。2025年、港区「二十歳の集い」実行委員長を務める。現在は、ベンチャーキャピタルにてアソシエイトとして活動中。

若者と町会のギャップ

港区には221の町会・自治会があり、補助金の総額としては7,364万円となっています。昼夜間人口比は373%と若者は地域にいますが、町会・自治会にはいないのが現状です。関わりたい人はいるけれど、窓口が不透明であったり、会費や活動内容があいまいなど、最初の一步が見えていないことが問題です。

動かない仕組みの負の循環

担い手が高齢化していったり、会費の減少によって入っても徳がないといった認識が広がっていることが問題点だと思います。このままだと地域継承、特にお祭りなど、港区ならではのものが無くなってしまうのではという強い危機感があります。

問い続ける港区へ

港区の人口は、特に20～39歳の若者層が増えていくというデータが出ています。これから関わってくる若者世代が主役になるべきだと思います。その中で港区は問い続けられないといけない、完成形ではなく問を出し、アップデートし続けなければいけないと感じています。

港区コミュニティアクション&共創ハブの創設

若者には情報の壁、心理の壁、価値の壁があると思います。提言として、港区コミュニティアクション&共創ハブの創設を目指したいと思っています。港区在住、在勤、港区との協定締結校、いずれかを満たす18～24歳までの若者を組織し、若者によって新陳代謝が生まれ、若者に対しての広報宣伝、新規人材の確保、プロジェクト等への若者人材創出などを行う団体です。

若者世代が主役となって、
港区は問い続けられないといけない。
アップデートし続けるべきだと思います

若者への明確な価値提供

まずは若者に対して価値提供を港区として行っていく必要があると思います。このいわゆるインカレに入ることによって、同世代との交流、他の学校や社会人問わず入ることができますので、ここでの交流は非常に大きなものになると思います。学業上の単位認定も大切だと思っています。今回、委員にも大学の先生がいらっしゃいますが、港区と若者の地域参画等の協定を結び、授業における単位認定が将来できていくと考えています。キャリア上のクレジット、いわゆるガクチカ、就職を考えている学生は多いのでアピールポイントの提供であったり、公式の認定証の発行、経済的インセンティブの提供などを考えています。

若者を惹きつける「参加のハシゴ」戦略

港区デザイン・インターシップを考えています。地域活動をとおしてキャリア形成やキャリアアップなど、実践的な学びの場を用意します。例えば、祭りの当日2時間だけ写真撮影をするなど、ギグ・ボランティアを行います。また、テーマ別プロジェクトとして、DX支援など、若者の好きをプロジェクト化していきたいです。

継続性の担保のための施策

町会・自治会等のプロジェクトの組成や管理をする人材を、国の地域活性化企業人材制度や地域おこし協力隊制度などを活用して、専門コーディネーターとして雇用したいと考えています。そのうえで、40歳以下で構成する港区次世代コミュニティ円卓会議を設置し、港区のいろんなセクターの人との連携を促進します。資金も必要となるので、多角的な資金調達を行っていきます。この仕組みができることで、将来的にお祭りなど、港区の歴史あるものが今後の未来に残っていくと考えています。

学生分野



杉山 琴珀 委員

戸板女子短期大学 国際コミュニケーション学科 学生

語学力を身につけられる大学を探し戸板女子短期大学を見つけ、決め手となったのがオープンキャンパスで出会った先輩方に憧れ、戸板女子短期大学に入学。入学後、英語や中国語、韓国語を学び、韓国短期研修に参加、修了。学内の異文化交流プロジェクトに参加し、大使館、米軍基地訪問、ボランティアに参加。現在、芝消防団に所属。

情報格差

情報格差とは、ICTを使える人と使えない人の間に生まれる差のことです。現在、小学校から一人一台タブレットを持っている状況で、スキルを持つ子どもが増えて高齢者との差が広がっています。高齢者はスマートフォンの操作が難しく必要性も無いと感じている人が多く、テレビや新聞での情報収集が多いため、緊急時や非常時に後れを取ってしまうことや、世間から孤立する恐れがあります。

若者は情報収集がインターネットやスマートフォンで完結してしまうため、パソコンでの操作が困難であったり、情報の信ぴょう性を疑えないまま鵜呑みにしてしまう可能性があると考えます。

言語の壁

外国人とのコミュニケーションの困難さがあります。TOEICや英検のスコアが高いけれども、外国人と実際に会話すると流ちょうにできず、会話を避けてしまう人がいます。こういった言語の壁が悩みになっている人が多いと思います。

防災意識の低下

頻繁に地震が起きても、これくらいなら大丈夫でしょ、と自分で判断してしまう人が多いと感じています。日本が地震大国だからこその気のゆるみだと思えます。また、消防団では年配の人が多く、もっと若い世代や同世代も防災、災害に興味を持ってほしいです。

情報格差をなくす、
言語の壁を超える、
防災意識を向上し、若者の関心を増やす

情報格差をなくす

情報格差をなくすためには、実際に体験してITを学ぶことで知識が付くと思います。

例えば、図書館でスマートフォンやパソコンを使用してブックカバーを作成するなど、やり方を若者が教えてコミュニケーションの場をつくると思います。

言語の壁を超える

言語の壁を超えるためには、コミュニケーションの場を増やすべきだと思います。

例えば、留学生が数週間、数か月単位で宿泊することができる学生会館があれば、もっと港区の学生と交流しやすいと思います。また、交流イベントの内容を参加者同士が企画し、考え、決めてもらうことが効果的だと思います。

防災意識を向上・若者の関心を増やす

防災意識を向上し、若者の関心を増やすためには、学校や大学での取組を強化することが効果的だと思います。

例えば、授業内で被災者の声を直接聴き、そこからどう対策していくのかなど、話し合ったり作業することで防災意識を高めていけます。また、消防団などが学校や学生寮に行き、訓練を手伝うことで、若者への認知が広がっていきます。港区の消防団のInstagramなどをフォローしてもらう仕組みをつくり、さらに周知していく必要があると考えます。

3. 私たちが描く2040年代の港区 ～未来へのメッセージ～

■多文化共生分野



コバーチ・エメシエ 委員

ハンガリー大使館 次席

エトヴェシュ・ローランド大学日本語専攻修了(修士号)、ハンガリー国立ダンス大学民族ダンス専攻卒業(学士号)、武蔵大学大学院人文科学研究科社会学専攻修了(博士号)。カーロリ・ガシュパール大学 講師、ハンガリー大使館文化担当官を経て、2025年5月よりハンガリー大使館次席。

外国人と日本人がお互いの文化を知り、理解する

もちろん、日本に引っ越してくる外国人は日本のことを知るべきだと思います。

しかし、お互いをよく理解するためには、日本人も外国人も文化や考えなどを理解すべきだと思います。

ここで、港区に感謝の気持ちを伝えたいと思います。

毎年行われる様々な外国の文化に注目しているフェスティバルやお祭りは、お互いを理解するための、とても素晴らしい機会だと思います。

ハンガリー大使館として、私たちは毎年参加させていただいています。

このような文化交流は、港区のレベルだけでなく、例えば、町会やマンションのお祭りのレベルでもできれば、もっと外国人と日本人の間の交流が強まると思います。

外国人もみんなが話し合う機会が増えて、
お互いにもっと頼って、友達になって、
サポートし合う多文化共生社会へ

幼少期の頃から異文化に触れる

日本に来てから気付いたことは、小さい子どもや赤ちゃんは、私の顔、つまり外国人の顔を見て少し怖がっています。

私は、小さい子どもたちが外国人を怖がらないために、よく笑って手を振っています。

この多文化社会の中で子どもたちの恐怖をどのように変えるかを昔から考えています。

港区のサポートで数年前からあるプロジェクトを始めました。

大使館として港区のいろいろな小学校で文化イベントを開いて、ハンガリーデーを開催しています。

その日は、学校の給食はハンガリー大使館のシェフが作ったハンガリー料理で、私は学校の子どもたちに私たちの文化についてプレゼンをします。

よくハンガリーの民族ダンスも教えます。

このイベントによって、きっと子どもたちの見方が変わるので、非常に重要なイベントだと思います。

可能なら、私は小学校だけでなく、もっと早いときから、幼稚園の子どもたちにも異文化を紹介すればよいと思います。

このようなプロジェクト、お祭り、フェスティバルによって、私たちみんなが話し合う機会が増えて、お互いにもっと頼って、友達になって、サポートする多文化社会をつくれると思います。

港区にゆかりのある方からのメッセージ





「世界中の人が住みたくなる
東京のなかの港区に
なるんじゃないかと思います」

伊藤 公平 さん
慶應義塾長

慶應義塾長の伊藤公平です。

慶應義塾は大学として三田キャンパス、さらには薬学部の芝共立キャンパスが港区にあります。

そして、女子高等学校、中等部も港区にあります。

麻布台ヒルズには予防医療センターという大掛かりなセンターがあり、そこでは皆さまが病気にならないための工夫のお手伝いや、さらには、万が一病気になった場合にそれを早期に発見する人間ドッグといった事業を繰り広げているところであります。

私は6歳から20歳まで港区に住んでおりました。

今も両親は住んでいますけれども、子どもの頃は親と一緒に港区オリエンテーリング大会に出たことを覚えています。たぶん第1回優勝者だと思います。

2040年代の社会は

どうなっていると思いますか？

2040年には人が減っています。

よほど海外から人が来ない限り減っています。人が海外からたくさん来るということになると、2種類に分かれるのではないかと思います。

様々な形でバリバリとAIを使いこなして、トップで活躍する人たち。

そういう人たちが、多く港区に集まるのではないのでしょうか。

それとはまた違って、様々な地域の様々な産業を支える人たち。

そういう方たちは日本中に散らばっていくのではないかと思いますのですけども、港区はますます国際化が進むのではないかと思います。

そのなかで港区に

どんな役割を期待しますか？

港区は世界中の人が住むことを目指すような、住みやすい場所だと思います。食べ物は美味しいし、水もキレイだし、人々も優しいし、オープンな雰囲気があって、歴史を感じさせる坂も多くあって。

その坂を見るだけで「青木坂…むかし青木家が住んでいたんだな」とか、あの史標を見ているだけで歴史も分かります。

歴史と、それから新しさと、住みやすさと、そして先進性がすべて一体となった、世界中の人が住みたくなる、東京のなかの港区になるのではないかと思います。



「スポーツが今よりもっと
文化として根付いている
社会になればいいなと思います」

木村 敬一 さん

東京ガス株式会社
パリ・東京パラリンピック
競泳 金メダリスト

東京ガス株式会社の木村敬一です。

パラ水泳選手をやっております。

私が所属する東京ガス株式会社の本社は浜松町にあります。

港区は、伝統的な寺社仏閣がある一方で、先進的なビジネスや文化を発信する場所なので、伝統と先進性が共存しているところが素晴らしいと感じています。

また、都会のイメージがありますが、緑豊かな公園や湾岸地域もあって、のんびりと過ごせる場所が存在しているところも、港区の良いところだなと思っています。

2040年代の社会は

どうなっていると思いますか？

イメージや希望も含めてですが、私はスポーツ選手をやっていることもあり、スポーツが、もっともっと日本人、港区民に浸透しているような、社会になっていてほしいなと思っています。

スポーツが区民の生活のなかに浸透して、スポーツをすることや、観戦に行くことが当たり前になっているような、スポーツが今よりもっと文化として根付いているような社会になってくれればいいなと考えます。

そうすると、人々の健康も増進されていき、我々障害者もスポーツに親しみやすいような社会が出来上がっているといいなと思います。

そのなかで港区に

どんな役割を期待しますか？

おそらく港区は様々なビジネスを含む文化的な中心になっていきます。

その中で、日本のスポーツ文化、健康文化、ユニバーサルデザイン文化というものをリードしていくような、中心となるまちになってほしいなと、なっていくのではないかなと思っています。



「未来においても
このエリアの持つ文化や歴史が
維持されていくことを期待します」

ジャンルイジ・ベネデッティ さん
駐日イタリア大使

皆さまこんにちは。駐日イタリア大使ジャンルイジ・ベネデッティです。

皆さまをお迎えし、このような機会を持てることを大変嬉しく存じます。在京イタリア大使館よりこのメッセージをお送りいたします。

ここは何世紀にもわたって存在してきた庭園の中にある並外れた歴史的な場所です。

私の背後に見えていただける庭園は江戸時代には松平家の中屋敷の庭園でした。1703年にはこの庭園でかの有名な10名の赤穂浪士が自害いたしました。そのような背景においても大変歴史的で重要な庭園だといえます。明治時代には、非常に重要な政治家であった松方正義の邸宅でした。

1930年からは在京イタリア大使館として使用されているこの地ですが、本日はこの短いメッセージの中で400年前から残された庭園を皆さまにご覧いただけることでしょう。

美しい歴史を誇る庭園の一方で、大使公邸はイタリア建築やイタリア製の調度品に包まれた大変美しい、まさに邸宅美術館のようです。私たちは港区にいられることがとても幸せです。

港区とは共に、本庭園を港区民の皆さま、および東京の別の区にお住まいの皆さまに一般公開するという大変興味深い取組も開始いたしました。

港区のご協力により、この庭園公開を年に3度実施することが叶います。それにより希望される皆さまに、この美しい庭園やこの邸宅美術館ともいえる大使公邸をご覧いただける機会をつくることができました。

2040年代の社会や港区は

どうなっていると思いますか？

今以上に近代的で、包摂的で、国際的で、デジタル化が進んでいて、そしてさらに持続可能な社会になっていることと存じます。

その中で港区が果たされる役割は、先に申しましたように、近代化が進む未来においても、このエリアの持つ歴史やこの地に在する大使館の歴史を維持されることだと存じます。

他方で、港区には今後もこの国際的な側面を持ち続けていただき、より開かれた社会になっていただきたいですが、この地を訪問される方々や東京に住みに来られる皆さまを温かく迎える社会であり続けていただきたいと思います。

A portrait of Mami Izumi, a woman with short dark hair, smiling and wearing a brown top. The background is a blurred indoor setting with warm lighting and orange accents.

「いろんなところを散歩して
港区の魅力的な場所を
これからも見つけていきたい」

出水 麻衣 さん
TBSアナウンサー

初めまして。TBSアナウンサーの出水麻衣です。

2006年にTBSテレビに入社。それが初めての港区との接点でした。かれこれ20年ほど港区にお世話になっています。

2040年代の社会や港区は どうなっていると思いますか？

すでに生成AIなどの台頭で我々の仕事やちょっとした事務作業をおおいに補ってもらっていますよね。

それが今まではソフトの部分でしたが、ロボットなどハードにもAIが実装されていく社会になっていく未来が訪れます。つまり私たちが今までと同じような働き方ではいけない時代も来るということです。ですが、見方を変えると私たちの可処分時間が増えるとも考えられますよね。

そのぶん住んでいる場所や身の回りの環境がより大事になってくるのかと思いますので、癒され、自分が好きだと思える場所に人々は移動して、そういったところで人生を楽しむようになるのではないのでしょうか。

働く以外の時間にも自分のリソースを割けるような時代が来ることを願っています。

そのなかで港区に どんな役割を期待しますか？

増上寺周辺や有栖川公園など、港区には緑豊かで、人々が憩える場所がたくさんあります。朝から晩までいろんな方が、そこでジョギングしたり、読書をしたり、お友達とピクニックしたり…素晴らしい環境を満喫されてますよね。

現在は、自分も含め、多くの方が港区で仕事をしていますが、将来的には、人生の半分は仕事、もう半分はより豊かに生きるために使う。そういった環境が整っていったらいいなと思います。

港区には魅力的な場所がたくさんありますので、2040年、私ももう少し仕事に余裕を持っていたら、港区各所をお散歩したいですね。歩きながら健康になり、美味しいものをいただき、友人とたくさん心が満たされる時間を過ごせる、そういった場所を見つけていきたいなと思います。



「2040年代、港区から
世界に輝く選手が
誕生することを願っています」

野口 啓代 さん
プロフリークライマー
オリンピック メダリスト

こんにちは。
プロフリークライマーの野口啓代です。
港区へは、クライミングジムだったり、プラ
イバートで訪れることも多かったですし、引
退後も2023年に増上寺で行われたスポーツイ
ベントに参加させていただいたりですとか、
つい先日も6月に高松中学校のボルダリング
ウォールの完成記念イベントに呼んでいただ
いたり、長年にわたってお世話になっています。

港区内には大きなボルダリングジムもたくさ
んありますし、スポーツ関連のイベントもた
くさん開催されていて、アスリートとしてと
ても嬉しく思っています。

また私自身、2歳になる子どもの母親でもあ
るのですが、子育てという面でも本当にまだ
まだ駆け出しなんですけど、やっぱりスポー
ツに触れる機会やイベントがたくさんある環
境というのは、子どもにとってすごく大切だ
なと感じています。

2040年代の港区に向けて

今から約15年後の2040年代、港区から世界で
輝く選手が誕生することを願っています。

最後に、港区民の皆さま、港区内にあるクラ
イミング施設やスポーツイベントを通して、
楽しく豊かな日々をお過ごしください。

また皆さまにお会いできることを楽しみにし
ています。

「様々な化学反応が生まれ
先端のものを創造していく。
そういうまちに進んでいくと信じています」

前田 伸 さん

株式会社TOKYO TOWER
代表取締役



株式会社TOKYO TOWER 代表取締役の前田伸と申します。

私にとって港区は、あって当たり前の存在です。

港区で生まれ、小学校は当時の檜町小学校（今の赤坂小学校ですね）、中学・大学も含め、大半の教育を港区で受けてきました。

そういう意味で、港区は私にとって自然な場所であり、存在なのです。

2040年代の社会や港区は

どうなっていると思いますか？

今、話題になっているAIですとか、自動運転モビリティが生活に溶け込み、様々な場所で活躍していることでしょう。

港区は今以上に環境に配慮され、防災面が強化し、より住みやすい場所に進化していると私は確信しています。

そのなかで港区に

どんな役割を期待しますか？

港区は様々な分野の方々が集まる場所です。国籍、性別、年齢等にとらわれないダイバーシティなまちです。

多くの方がぶつかり合って、化学反応を起こし、先端のものを創造していく。それがまさに港区であると思っています。

